

近世の京都は、江戸に次いで多くの画家が集住する日本絵画の中心地のひとつである。近代になると流入する西洋絵画に対して、自らのあり方をみつめなおす機会も増し、その結果として新しい日本絵画の様式が誕生した。東京と京都では画家たちの近代化に対する考え方も実践の方法も異なり、京都の日本画家たちに対して京都画壇という呼称も行なわれるようになる。今日なおこの言葉は生きているが、時代の流れの中で次第にその姿は変化している。本事業では、京都画壇を画家だけがつくるものとは考えず、それを支える諸業との関わりの中に成立するものと考え。絵画が制作され鑑賞される京都という場の記録として、現在の視点から京都画壇にかかわる記憶を収集し、後世に伝えることを目的とする。

今年度考えているのは、京都の画塾の現在である。近世の京都にはあまたの画家が師弟の教育を行ない、私塾を開くものもいた。その流れは近代におよび、画学校の開校という絵画教育の近代化を見せる一方で、私塾による独自性を持つ教育を行なうものを増やして行く。それが京都画壇形成のひとつの推進力となっていた。京都における近代日本画の歴史の中で画塾の役割は決しておろそかなものではない。現在京都の画塾も多くが姿を消しているが、今なお命脈を保つものがある。今年度は、昭和9年に堂本印象によって作られ、同13年から塾展を開催している東丘社の現在を、同社の幹部である由里本出氏にお話いただいた。

堂本印象は本学の前身京都市立絵画専門学校の卒業生であり、教員も務めた文化勲章受章者である。彼が開いた東丘社は、日展系の作家によって構成され、印象没後も会員らによって運営を続け、現在も尚研究会によって研鑽に努めている。狭い地域に画家が集住する京都ならではの地の利を生かし、画家どうしが互いに切磋琢磨する様子を、昭和37年同社に入り、風景画に独自の世界を築いて近年妙心寺龍泉庵の襖絵を揮毫したことで知られる由里本氏に話をうかがい、京都の画塾の現在を記録したいと考えている。

松尾 芳樹(芸術資料館学芸員)